

書評

[評者]
林 寛之
福井大附属病院教授・総合
診療部



処置時の 鎮静・鎮痛ガイド

乗井達守 編

●A5 頁256 2016年11月
定価：本体4,000円＋税
[ISBN978-4-260-02830-1]医学書院刊

「医学は耳学問とみたり」などという指導を受けて育ったわれわれ古だぬき医者にとっては、本書は目からうろこの宝の山だ。特に事例が多く、薄い本というのが実によい(テヘ！)。古来、日本人は我慢強いのが美德とされ、患者さんの痛みにはあまり共感的ではなく、処置を優先するのが当たり前であった。「胃カメラで鎮静してほしいなんて根性のない」などと言ったものだが、とんでもなっぶん、胃カメラは特に若い人であれば地獄のようにつらい手技であることに変わりはない。

不思議なことに、医療者も自分自身が患者にならなと患者に寄り添う本当の医療が実感できないものなのかもしれない。古狸先生が患者さんに優しい良医である場合、案外自分も健康を害したことがあり、その経験が良医たるべく肥やしになっているのではないかしらん？「痛み」は第5のバイタルサインと言われ、患者さんの敏感であることも、医療者としてはすごく大事な資質なのだ。

でも、経験が少ない若先生に朗報です。海外では当たり前のように、鎮静・鎮痛のガイドラインに沿った医療が行われている一方、日本ではなかなか学ぶ機会のなかったこの手法を本書から学ぶことができるようになりました。パチパチ。

患者さんの安全安心を提供するためには、自分が慣れた薬剤を数種類知っていればよい。単なる薬剤の使い分けを知るのではなく、同時進行で必要なモニタリングの知識、副作用、合併症、状況別の使い分けを知っておくと臨床に自信が付いてくる。本書では、救急外来、CT室・MRI室、気管支鏡、歯科処置に関して具体的な記載があるので、基本的な鎮痛・鎮静はできるようになる。特に合併症をきたしやすい小児や高齢者に関して、別章を立てて解説しているのは特筆すべきことだ。鎮静も過ぎたるは及ばざるがごとし、ちょうどいいのが一番よい。その点、日本の保険診療に沿った形になっており、海外の単なる訳本とは根本的に異なる、日本の医療のための本と言える。

巻末にはいつでもすぐチェックできるように薬剤などのまとめが書いてあるので、読了後も本書を調べてひととくのが便利な構成になっている。

小児の顔面縫合など、子どもを押さえつけるような野蛮な荒行は卒業して、適切な環境で適切な薬剤を適切な量使えるようになると、きっとあなたも自信を持って良医にまた一歩近づけたと言えるんじゃないかしらん？